

# 静岡県臨床衛生検査技師会のあゆみ

## 1 歴代会長の紹介と挨拶

初代会長	野口政輝	昭和28年度～昭和35年度
第2代会長	石川徳市	昭和36年度～昭和42年度
第3代会長	小林芳治郎	昭和43年度～昭和50年度
第4代会長	栗原勇一	昭和51年度～昭和57年度
第5代会長	岡山虎男	昭和58年度～平成3年度
第6代会長	宇佐美元章	平成4年度～平成5年度
第7代会長	福田文男	平成6年度～平成7年度
第8代会長	川越功	平成8年度～平成9年度
第9代会長	柴崎光三	平成10年度～平成15年度
第10代会長	高木義弘	平成16年度～平成17年度
第11代会長	泉正和	平成18年度～平成21年度
第12代会長	横地常広	平成22年度～平成25年度
第13代会長	三宅和秀	平成26年度～平成27年度
第14代会長	山口浩司	平成28年度～平成29年度
第15代会長	伊藤喜章	平成30年度～

## 静岡県臨床衛生検査技師会の 創立65周年記念誌の発刊に寄せて

第10代会長 高木 義弘



静岡県臨床衛生検査技師会の創立65周年記念誌の発刊にあたり、一言お祝いを申し上げます。

65年の年月を振り返ると、あらゆる業種職種がコンピューターの発展や機械化によって、めざましい変化を遂げています。臨床検査の分野においても、私が検査技師になった頃は、試験管、ピペット、分光光度計、メランジュール、自家製の細菌培地等々、いわゆる、マニュアル中心の検査室でした。検査データの値も個々の施設だけでなく、教本や一般の健康本に掲載されている正常値、異常値（今の基準範囲、臨床判断値に近いもの）も違っていました。

個々の施設の精度を把握改善し、検査データの施設間差是正を最終目標に、1984年（昭和59年）11月各施設の精度を調査すべく始まったのが、現在も続けられている静岡県精度管理調査です。全県の施設を網羅した精度管理調査とその報告会の実施は、全国初と言っても過言ではありません。開始当初は、各施設の内部精度管理調査でした。まだまだ内部精度管理が定着していない時代で1日2濃度2回5日間の測定データを評価しながら、様々な調査と活動をしていました。その後、検査機器の進歩、試薬のキット化、検査法の標準化が進み、今や施設内精度管理と施設間精度管理が同じレベルに達しているのをみると驚嘆の限りです。

検体検査がそのような改善改良が進む中、診療報酬の影響も含めて生理検査や採血業務など、より臨床現場に近い検査業務への関わりが要望され、多くの施設が現在の体制となっているのではないのでしょうか。更にこれから、検査法の進歩やAIの導入で、今までとは違った臨床検査室が構築されるかもしれません。

技術の進歩によって生まれてくるものがあれば消えるものもあります。昔はほとんどの路線バスには、運転手と車掌が乗務していました。若い人は知らないと思いますが、車掌は乗車賃の徴収や行き先の案内放送、運転手の補助などをしていました。しかし、現在は運転手が全てを担っています。さらに、ドローンを使った宅配便や2020年東京（とうきょう）オリンピックの時にはAIとセンサーを使った無人タクシーが計画されており、運転手もいなくなる時代となりそうです。

23世紀の宇宙を舞台にした昔のSFテレビドラマ「スタートレック」でみたことですが、病人の診察に小形のモニターのようなものを近づけて診断していました。今風に見ればCTやMRIの簡易版のようなもので、採血や心電図検査もなく全ての病状を診察していたと思います。今は検査者の技術に委ねられる点が多いエコー検査も、プローブが勝手に検索したりプローブそのものが存在しない時代が来るかもしれません。今や遺伝子検査も一滴の血液で、かつPOCTで出来ます。爪や表在の毛細血管をスキャンするだけで検査が出来れば、患者負担の大きい採血もなくなるかもしれません。

臨床検査の精度管理も機器メーカーや試薬メーカーの企業努力によって成し得ている点も多く、POCT検査も項目を増やしつつ定着してきています。検査相談もインターネットを使えば簡単に情報が得られます。これからの臨床検査を憂うとともに、新たな臨床検査が静岡技会員諸氏から創造され、コ・メディカルスタッフとしてではなくメディカルスタッフとして活躍され、70周年80周年と迎えられることを期待いたします。

## 創立65周年記念誌の発刊によせて

第11代会長 泉 正 和



この度、(一社)静岡県臨床衛生検査技師会が創立65周年を迎え、記念事業の一環として記念誌が発刊されますことを心よりお祝い申し上げます。また、この記念誌発刊にご尽力された関係者の皆様に深く敬意を表します。

温故知新(故きを温ねて新しきを知る)という言葉がありますが、創立65周年を迎えるにあたり今一度技師会の歴史を振り返ってみたいと思います。

静岡県臨床衛生検査技師会史を紐解くと、昭和24、25年頃には、多くの病院で検査は中央化されておらず、そこに働く技術者もそれほど多くなかったとあります。検査に従事していた技術者の多くは衛生研究所や保健所で仕事をしており、各施設の技術者間で相互の情報交換は多くありませんでした。そのような中、昭和26年頃より、皆が団結して「日進月歩の医療や公衆衛生などの知識と技術の向上を図り、もって医療や公衆衛生に寄与しよう」という強い声が上がりはじめたのです。この熱い思いに賛同した方々の多大なるご尽力により、翌年には衛生検査技術者会設立準備会が発足し、年明けの昭和28年1月に静岡県衛生検査技術者会が設立されたのでした。1年余りで会を設立させたことから、先輩方の情熱は並大抵のものではなかったと推察されます。

設立当時の検査は微生物検査が主でしたが、次第に血液学、生化学や免疫・血清学検査が普及し、検査項目と件数が増加しました。多数の検査を迅速に分析するための自動分析装置が導入され、その後検査のシステム化へと発展していきました。多数検体を処理する自動分析装置の導入と共に、検査分析方法の改良や開発も行われました。一方、検査精度向上に向けた多くの取り組みがなされ、検査の精確度が格段に高まっていきました。本県では、静岡県の健康福祉部、医師会、臨床衛生検査技師会が協力して毎年実施している精度管理調査により、県内臨床検査値の標準化が進んでいます。医療現場で役立っている検査データは、たゆまぬ精度管理の取り組みの上に成り立っているのです。学術面でも、技師会役員が中心となり多岐にわたる研修会が開催され、多くの会員が熱心に参加されています。ここで得られた知識・技術は日々の業務に活かされ、医師をはじめとする医療従事者から頼りにされる検査技師へと成長し続けています。

医療機能分化などが謳われている最近の医療情勢に鑑みると、社会環境の変化により従来型の検査だけに囚われてはいけなことが推測されます。医療チームは我々に何を期待しているのか、更に進んで、我々はどのような領域で社会に貢献できるのかを協議していく必要があるでしょう。しかし、そのような中においても、医療や公衆衛生に寄与しようとした先輩たちの気概を忘れず、これからも会員諸氏が団結・協力して静岡県臨床衛生検査技師会を発展させていかれることを祈念して止みません。

## 創立65周年記念誌発刊に寄せて

第12代会長 横地 常広



この度、貴会が創立65周年を迎えるにあたり、心よりお祝い申し上げます。今日に至る長き道のりの中で、法人団体としての組織運営基盤を整備し、社会的な認知度を広め、臨床検査技師の制度・身分の確保及び学術の振興、技術の研鑽にご尽力いただいた諸先輩方をはじめ、皆様方のご苦勞に敬意を表します。

さて、わが国の急速に進む少子・高齢化に対し、世界に誇る「国民皆保険制度」を持続可能な制度として確保するための様々な施策が、打ち出されています。団塊の世代が75歳に達し、医療や介護の需要が増大する2025年に向けて、地域包括ケアシステムの構築など医療提供体制の改革が始まり、急性期病床が減少するなど、病院を取り巻く環境も大きく変化しようとしています。更に、わが国の人口減少を克服し、安定した経済成長で持続できる社会保障制度を堅持するために、医療分野においては創薬などのイノベーションを推奨し、IoT、人工知能（AI）、ロボットなどの開発が加速されています。このような中、平成29年6月、第193国会において、「医療法及び臨検法」の一部改正が成立し、医療機関、衛生検査所（プラントラボを含む）の検体検査について、品質・精度管理に係る基準を定めた根拠基準が新設されました。また臨検法上の検体検査6分類を、新たな検査技術に対する柔軟かつ迅速に対応できるように省令委任とし、分類に遺伝子検査を追加するなど見直しが行われました。医療機関、検査機関における臨床検査の基盤が確立し、検体検査の精度保証は、我々、臨床検査技師が担うと法律に明記されたことを意味します。法改正に伴い、平成30年12月1日の施行を踏まえて、施行に向けた整備として、平成30年7月27日に改正省令が発出され、8月10日に医政局長通知が出され、各医療機関、衛生検査所において準備が進められています。このような状況を踏まえて、検査の専門家として、国民に安心安全な質の高い医療を提供するために、各種事業を展開し、会員の資質向上や社会的立場での身分・地位向上を目指し、人材育成も含めて活動していくことが必要であります。

静岡県臨床衛生検査技師会（以下、静臨技と略。）との関わりは、平成6・7年度に福田会長の下、事務局長を務め、平成20・21年度に泉会長の下、常務理事を務めさせていただきました。その後、平成22年度から2期4年間会長に就任し、「会員の顔が見える技師会活動」をスローガンに活動させていただきました。

技師会活動はどうしても基幹病院が中心の事業展開ですが、地域医療を支える中小病院の会員が参画できる事業を目指して、県内を3支部に分けて「いつでも、どこでも同じ検査結果」をめざし、検査データの標準化を進めるための知識と技術の普及を主軸として、検査室で頻発する身近なトラブルを事例として取り上げながら、検査データの標準化事業の意義について、啓発活動を県内全域で広く展開しました。

また、平成25年度には「検査のひみつ展」を静臨技主催で、一般市民向けに「健康増進」を目的に、健康診断、検診の重要性、生活習慣病の知識と罹患に対する予防の大切さを、各種検査項目の測定原理や測定意義を解説しながら、日々の生活習慣を改善することにより「健康寿命の推進」に繋がることを説明するイベントを企画しました。その内容は多岐にわたり、尿検査では腎臓の仕組みから、尿中に糖、タンパク、血液など異常値が出てくる場合の仕組みや病気との関連、細菌検査では、感染の起因菌の培養と同定の仕組み、薬剤選択のための感受性試験と薬剤選択方法、血液検査では、顕微鏡下で細胞成分（赤血球、白血球、血小板）の形態と役割、病理検査では、がん細胞の特定方法、超音波検査では、画像描写の原理とファントムを使った模擬検査などを行い、医療における臨床検査データの重要性を唱え、同時に、臨床検査の職業紹介を通して臨床検査技師の社会的認知度の向上に向けた2日間は、延べ1,600人を超える来場者を迎えることができました。その後も静臨技事業として継承され、毎年、開催されていることに敬意を表します。特に、平成20年4月から平成26年5月までの6年間は、会員をはじめ役員の方、諸先輩方のご指導のお蔭をもちまして、無事大役を務めることができましたことに感謝申し上げます。

その後、平成26年6月より、（一社）日本臨床衛生検査技師会の専務理事（常勤役員）として、臨床検査業界に関わらせていただいております。平成28年6月からは代表理事副会長として、職能団体の代表として臨床検査技師の身分確保や業務拡大に向けて、微力ながら活動しております。医療情勢が大きく変わろうとしている現状の中で、10年後、20年後の臨床検査技師のあり方を模索しながら、全国47都道府県技師会を通じて情報発信に努めております。都道府県技師会との連携が不可欠であり、今後とも静臨技のご支援とご協力をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、静臨技の活動を通して、更に地域医療の担い手として活躍されることを祈念申し上げ、記念誌発刊に向けたお祝いとさせていただきます。

## 一般社団法人静岡県臨床衛生検査技師会 創立65周年記念誌発刊に寄せて



第13代会長 三宅和秀

一般社団法人静岡県臨床衛生検査技師会創立65周年記念誌の発刊おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

諸先輩方が静臨技の発展にご尽力された後を引き継ぎ、理事の皆様並びに会員の皆様のご協力をいただき、第13代の会長として職務を全う出来ました事を、この場をお借りしてお礼申し上げます。

任期中、第54回日臨技中部圏支部医学検査学会を、一般社団法人静岡県臨床衛生検査技師会が担当し、平成27年9月26日(土)・27日(日)の両日、静岡市のグランシップにおいて開催いたしました。メインテーマを『守 破 離』サブテーマが「臨床検査技師の目指す道、基本と今と未来を考える」と題し「道」の教えを私たちの世界に置き換え、臨床検査技師が今こそ目指さなければいけない方向を考える学会として活発な議論をしていただきました。理事・実行委員・実務委員の皆様のご協力によって、演題数170演題、参加者973名と盛会裏に開催することが出来ました。

また、平成30年5月開催の第67回日本医学検査学会の開催地が、静岡県浜松市に決定されたことも大変うれしく感慨深いものでした。昭和56年に静岡市で開催されて以来37年ぶりの大事業になりました。私が生きている間に、もう一度静岡県で全国学会を開催していただける事を切に希望いたします。

私が臨床検査技師になった頃を振り返りますと、医療業界は診療報酬が右肩上がり、護送船団の様にのんびりと、みんなで渡れば怖くないという感じの時代だったように思います。現在は、医療を取り巻く環境が大きく変化しており、団塊の世代が75歳以上になる2025年に向けた地域包括ケアシステムの構築が進むなか、臨床検査技師を取り巻く環境も変化しています。精度保証が担保されたデータを提供することは当然ですが、検査説明・相談のできる臨床検査技師の育成、また検体採取については、法改正により厚生労働省指定講習会の受講によってライセンスが追加され、メディカルスタッフとして臨床の現場に積極的に参画できる体制が整備されてきています。

このような中、平成29年通常国会にて「医療法等の一部を改正する法律」が成立し、医療機関ならびに衛生検査所における検体検査に精度管理が新たに創設されました。また、がんゲノム医療や医療分野におけるAI技術の応用など、従来の検査業務体制からの変革が強く求められます。

今後は、病棟業務や在宅医療への進出も必要になってくるでしょう。「パラダイムシフト」という言葉を耳にしますが、その時代や分野において当然のことと考えられていた認識や思想、社会全体の価値観などが、革命的にもしくは劇的に変化することで、もう少し噛み砕いて言えば、その時代や分野において主流だった古い考え方に代わり、新しい考え方が主流になることです(「パラダイムシフト」Wikipedia:フリー百科事典より)。我々、検査技師の仕事もパラダイムシフトを迎えていると言えるでしょう。

医療に対するニーズの多様化、複雑化により臨床検査技師の職域も検査室から外来や病棟へ、病院から在宅へと、より患者の身近での検査業務が求められています。患者の視点に立った医療の提供が求められ、チーム医療の推進が加速されている現状において、臨床検査技師以外の他職種の業務を我々は知る必要があります。多職種連携のための臨床検査技師能力開発講習会は、他職種の業務等を学び、多職種連携のチーム医療に積極的に参画することで、医療の質の向上に貢献することを目的とし、2018年度から3年継続事業として静臨技が開催されるようです。これからの臨床検査技師には必須の内容となっていますので、多くの会員に参加していただければと思います。

最後に、一般社団法人静岡県臨床衛生検査技師会の益々のご発展と、会員の皆さまのご活躍を祈念して発刊のお祝いとさせていただきます。

## 一般社団法人静岡県臨床衛生検査技師会 創立65周年のお祝いと更なる発展に向けて

第14代会長 山口 浩 司



この度、一般社団法人静岡県臨床衛生検査技師会（以下、静臨技）が創立65周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。また、この節目を迎えることができますのも、草創期の幾多の困難を乗り越え、運営を引き継がれた歴代の会長及び役員の方々のご尽力と、会員皆様の日頃のご指導と暖かいご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

わたしたちが行っている臨床検査技師の仕事は、明治時代に医師の行っていた検査を技術者として手伝うところから始まり、それから現在に至るまで新たな検査技術を築きながら道を進んできました。これからの道のは、AI（人工知能）やがんゲノムなど急速に進化する新たな医療技術を活用しながら、一方で多職種連携やチーム医療にしっかりと携わっていく、そういった時代の変化に対応していくことが重要です。

2010年代の現在、世界は第4次産業革命といわれる変化の中にあり、そこで用いられるIoT・ビッグデータ・AIやロボットで医療の現場は予測できないほどの、大きな変化がもたらされると推測されます。そのひとつに第1次から第3次産業革命までは人間の労力や人間の手を介して機械を制御していたのに対して、第4次産業革命は人間の代わりにAIが機械を自動制御するという特徴が挙げられます。AIの精確性の高さや処理能力の速さは大きなメリットであり、今後のわたしたちの業務においても積極的な活用が求められますが、その結果として検体分析や画像に関する検査は省力化や省人化が進んでいくと予測され、そういったことを踏まえて人間にしか出来ないことを実践することが必要です。例えば、分析装置の管理や検体測定は可能な限りコンピューターやAIに置き換え、検査データの解析や説明などにより医師の診断や治療に繋ぐ役割を担うことや多職種連携やチーム医療として患者さんの前に行くことが、これからの役割として求められていると考えます。

また、少子高齢化社会において経済社会を維持するためには一億総活躍社会が必要となり、そういう時代にわたしたちはどうあるべきかを考えることが大切です。100歳まで生きる時代の、皆さんの仕事人生や人生設計のなかで、自分の強みやモチベーションを活かして臨床検査技師としてどのように携わり、活躍していくかを考えていきましょう。長寿社会では長く働くことが前提になりますから、医療の進化や変化に対応した認定や資格の取得によるスキルアップが重要な要素であり強みになります。これからは、臨床検査技師としてプラスアルファのスキルを身に付け評価される、そういった堅実な資格職として常に進化し人生100年時代においても活躍し続ける職種になることを願っています。

さて、2018年5月には浜松市で静臨技が担当県として第67回日本医学検査学会を開催致しました。静岡県の前回開催は1981年でしたので37年を経た開催でしたが、静臨技理事や学術部門員、会員の皆様のご支援ご協力をはじめ日臨技関係者の方々のご指導をいただき、盛会裏に開催することが出来ました。学会の準備は、3年前の招致活動からスタートしましたので理事や役員にとって2期にわたる長きプロジェクトとなりましたが、それぞれの役割を全うし準備や運営に携わった静臨技皆様の熱い思いとエネルギーは全国の会員皆様に伝わったと思います。

結びになりますが、この65周年がこれ迄の歩みを振り返り、会員及び賛助会員、また関係団体が一丸となって今後の発展と更なる活躍を目指す新たなスタートになることを願います。